



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教化文学『トゥヌクダルの幻視』の死後世界観と道徳劇『堅忍の城』の死後世界観から見る教化メディアの特徴
Author(s)	山梨, 夏水
Citation	北大宗教学年報, 3・4合併号, 14-15
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88695
Type	other
File Information	3_4_02_p14-15.pdf



【修士論文要旨】

教化文学『トゥヌクダルス』の死後世界観と道德劇

『堅忍の城』の死後世界観から見る教化メディアの特徴

山梨 夏水

死というテーマは、現世での行いによって魂の行き先が決まるキリスト教にとって重大な関心事であった。民衆による死に関する教えの受容のあり方を明らかにするため、聖職者によって作られた教義自体だけでなく、実際に民衆へ布教の手段であった教化メディアを研究対象とした。中でも教化文学『トゥヌクダルス』と道德劇『堅忍の城』という、現世の罪の浄化のため、死後懲罰を受ける描写がある二作品を選んだ。

『トゥヌクダルス』と13世紀の教義の死生観では、類似点として、神の慈悲が死後の魂に大きな影響をもたらすことと、後に煉獄と名付けられる、死後の浄罪のための中間地点の存在を肯定している点が挙げられる。相違点には、教義では見られた生者による執り成しの祈りが物語には無いことがある。罪の赦しは懲罰によってのみ行われ、生者による介入は描かれない。

一方で『堅忍の城』と15世紀の教義の死生観では、類似点として死後の浄罪の場所である煉獄の誕生と、いまわの際の改悛による救済が挙げられる。この頃天国と地獄の中間地点が煉獄と名付けられた。いまわの際の改悛とは、臨終の痛悔によって、死後地獄行きを免れ、煉獄で浄罪するための行為である。相違点は、死が悲惨であるか否かと、執り成しの祈りの有無についてである。教義では希望に溢れた死が強調されているが、物語では死の恐怖や絶望を強調している。また、この頃最盛期を迎えた執り成しの祈りは物語で描かれない。

次に『トゥヌクダルス』と『堅忍の城』の死後世界観の類似点相違点について考察する。類似点として両教化メディアとも中間地点・煉獄(以下、煉獄)の地獄化を行なっていることを指摘した。煉獄は、魂が天国に行く前に浄罪を行う希望の場であると教義には示されているが、物語の中では煉獄の懲罰は地獄並みの厳しさに描かれている。そして相違点は、罪の浄めと赦しのあり方に見られる。『堅忍の城』では死後の浄罪のため、死への生前の備えとしていまわの際の改悛が行われており、懲罰以外の救済のための行為が描かれる。対して『トゥヌクダルス』では、浄罪は懲罰のみによって行われ、執り成しの祈りのような、教義に基づいた介入行為が見られない。

煉獄の地獄化が二つの教化メディアで共通して行われた理由として、教えに忠実でなか

教化文学『トゥスクダルの幻視』の死後世界観と道德劇『堅忍の城』の死後世界観から見る教化メディアの特徴（山梨夏水）

ったという生前の罪によって発生する死後の懲罰を過激に描写することで「教えに忠実に生活する」という両教化メディアの目的が達成されることが期待されたことが挙げられる。教義通りの執り成しの祈りのような外部要因によって赦しを得る煉獄像は、教化したい内容と相反する。

いまわの際の改悛が懲罰以外の救済行動であり、煉獄の地獄化に反しながらも『堅忍の城』に登場したことは文学理論の「物語没入－物語読解モデル」によって説明される。これは物語の状況モデルが没入体験を促し、その没入体験が物語読解効果を作ったとするモデルである。教化メディアの役割の一つとして、物語読解効果の一種である自己意識の変容がある。変容を促す仕組みが物語の中に必要であったため、読み手が主人公と自分自身を同一視するための状況モデルとして、いまわの際の改悛を物語の中核に据えたと考えられる。逆にもし、当時重視されたいまわの際の改悛の描写を欠いた物語編成であれば、読み手の没入体験の障害となり、物語読解効果である自己意識の変容が阻害されたと考えられる。

両教化メディアで類似した「中間地点・煉獄の地獄化」と相違した「罪の浄めと赦しのあり方」は、「現世で罪を犯さず教えに従って生きるべし」という自己意識の変容を訴えるメッセージを伝えるための仕組みであったと結論づけた。前者は同様のメッセージを伝える内容部分に直結していることから類似点となり、後者はそのメッセージを効果的に伝えるための手段として相違点となったことが明らかとなった。